日本語版本来性尺度の検討

ーパーソナリティ特性としての本来性の発達ー

○石川清子・菅原嗣一・加部千尋・根岸良太

(東京福祉大学大学院心理学研究科)

キーワード：本来性尺度・本来性特性・発達の差異

The Development of a Japanese Authenticity Scale : Research on the Authentic Personality Development

Kiyoko ISHIKAWA, Tsugukazu SUGAHARA, Chihiro KABE and Ryota NEGISHI

(Graduate School of Psychology, Tokyo University of Social Welfare)

KeyWords: Authenticity Scale, Authentic Personality, Developmental Issues

目 的

近年教育環境の中で顕著に見られる傾向として、子どもたちや青年たちの表面的な対人関係の在り方(石本ら, 2009; 杉浦, 2000)や自尊感情の低下(市毛・大河原, 2009)が指摘されている。この様な個人内特性が環境的要因に影響を受け、さらに対人関係における諸問題を作り上げる。その様な負の循環に対処するであろう人の特性として, Authenticity(本来性)が上げられる。Wood et al. (2008)は, 本来性と主観的ウェルビーイング及びパーソナリティ特性との関係において, Authenticity Scale(本来性尺度)の信頼性と妥当性を明らかにした。本研究では, 海外の本来性の研究をもとにして, 本来性の文化的な違いと発達段階による違いに焦点を置き検討した。その一環として, Wood et al. (2008)の Authenticity Scale の日本語版作成とその整合性を検討することを目的とした。

方 法

【調査期間と対象者】2014年3月から2014年5月において, 青年版は高校生(2年)及び大学生計270名, 児童版は小学生(5, 6年)及び中学生(1, 3年)計473名を対象に質問紙調査を実施した。【質問紙内容】質問紙は, Wood et al. (2008)の本来性尺度を採用し, 質問項目の内容と文章表現を日本の文化に適合させることに注意しつつ, バックトランスレーション法を用いて青年版と児童版を構築し, その信頼性と妥当性を検討した。

結 果 と 考 察

青年版, 児童版各 12 項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。その結果, Wood et al. (2008)の Authenticity Scale と同様の 3 因子が得られた(Table1, 2)。

青年版, 児童版の第一因子は, Authenticity Scale(Wood et al., 2008)の第三因子 Self-Alienation を基に, “自己疎外感”とした。“自己疎外感”とは, 本来の人間らしさを失った状態であり, 自己への違和感である。青年版第二因子・児童版第三因子は, Authenticity Scale(Wood et al., 2008)の第二因子 Accepting External Influence を基に, “他者影響感”とした。“他者影響感”とは, 周囲からの影響を受け入れる感覚である。青年版第三因子・児童版第二因子は, Authenticity Scale(Wood et al., 2008)の第三因子 Authentic Living を基に, “本来的自己感”とした。“本来的自己感”とは, ありのままの素直な自分であるという感覚である。

青年版と児童版では, 第二因子と第三因子の順が異なっていた。その理由として, 青年期はありのままの自分を表出することよりも, より周囲の目を気にして自分を表出する年代であることが挙げられる。逆に, 児童期は, 周囲の目を気にせずありのままの自分を表出する年代であるため, このような結果になったと考えられる。

また, Authenticity Scale(Wood et al., 2008)の第一因子が Authentic Living であったのに対し, 日本語版本来性尺度では Self-Alienation(“自己疎外感”)であった。この理由として, 日本人は, 個人的な価値よりも関係性調和を維持し,

人並みであることを望んでいることが考えられる。さらに, 内田・萩原(2012)によると, この陰陽思考がネガティブさに繋がると指摘されている。

Wood et al. (2008)の Authenticity Scale は内容としては抽象的な事柄, つまり個人の実在的な存在の意味を問うものである。本研究における因子分析の結果が Wood et al. (2008)の Authenticity Scale の 3 因子と一致したことで, 日本語版本来性尺度も同様の事柄を問うことが示されたと考えられる。

(注)上記の詳細及び青年版と児童版の発達の差異についての分析結果は, 当日本ポスターにて示す。

Table.1 青年版本来性尺度 因子分析結果

項目No.	項目内容	F1	F2	F3
自己疎外感($\alpha = .78$)				
10.	私は, 自分が自分でないように感じる。	.73	.35	-.06
7.	私は, 自分自身のことをよくわかっていないような気がする。	.65	.07	-.15
2.	私は, 自分の気持ちが変わらない。	.65	.21	-.14
12.	私は, 今の自分に違和感を感じている。	.64	.16	-.08
他者影響感($\alpha = .66$)				
4.	私は, 普段, 他者の言うとおりに行動する。	.20	.58	-.43
6.	他者は, 自分に非常に強い影響を与える。	.28	.55	-.06
3.	私は, 他者の意見に強く影響を受ける。	.08	.50	-.20
5.	私は, 常に他者の期待に応えられることに必要性を感じている。	.20	.50	.07
本来的自己感($\alpha = .59$)				
9.	私は, ほとんどの場合, 自分に正直である。	-.25	.35	.35
8.	私は, 自分の信念に寄り添って生きている。	-.09	.14	.83
11.	私は, 自分の価値観と考えによって生活している。	-.06	.37	.49
1.	私は, 自分は人気者であるよりも, ありのままの自分でいたい。	.06	-.09	.23

Table.2 児童版本来性尺度 因子分析結果

項目No.	項目内容	F1	F2	F3
自己疎外感($\alpha = .64$)				
10.	私は, 自分が自分でないような気がする。	.82	.15	.14
7.	私は, 自分自身のことがよくわからない気がする。	.70	.17	.23
2.	私は, 自分の気持ちがよくわからない。	.60	.12	.22
12.	無理をしている自分が嫌だ。	.16	.11	.14
本来的自己感($\alpha = .59$)				
1.	私は, 自分が人気者であるよりも, ありのままの自分でいたい。	-.10	.72	-.15
8.	私は, 自分の考えを持って生活している。	-.22	.52	-.00
9.	私は, 自分の気持ちに素直だ。	-.23	.46	.05
11.	私は, 自分が「大切だ」と思う気持ちを持っている。	.14	.37	.06
他者影響感($\alpha = .59$)				
3.	私は, 周りの人の言うことで, 自分のやることや考えが変わる。	-.00	-.05	.65
4.	私はいつも, 周りの人の言うとおりにする。	.21	.12	.56
5.	私は, いつも周りの人がやってほしいことをするのは大切だと思う。	.26	.05	.39
6.	周りの人は私のやることや考えを変えさせる。	.24	.20	.37

引 用 文 献

- Wood, A.M., Linley, P.A., Maltby, J., Baliousis, M., & Joseph, S. (2008). The Authentic Personality : A Theoretical and Empirical Conceptualization and the Development of the Authenticity Scale, Journal of Counseling Psychology, Vol. 55, No. 3, 385-399.
- Kernis, M.H. & Goldman, B. M. (2006). A Multicomponent Conceptualization of Authenticity: Theory and Research, Advances In Experimental Social Psychology, Vol. 38, pp. 283-357.
- Harter, S. (2002). Authenticity. In C.R. Snyder & S.L. Lopes (Eds.), Handbook of Positive Psychology (pp.382-394). Oxford, England: Oxford University Press.